

## 緑内障と鍼灸治療

[緑内障とは?]

眼球の中には『房水』と呼ばれる水が入っていて、角膜や水晶体（レンズ）に栄養を与え、眼圧を維持して眼球の形を保つ働きがあります。房水は眼の中で作られ、そして排泄されていきますので、通常、眼圧は一定の範囲内に保たれます。しかし、房水の巡りが何らかの原因で悪くなる、あるいは必要以上作られ過ぎてしまうと、房水が溜まっていき、眼圧が高くなってしまいます。すると、眼の奥にある視神経が押しつぶされ、視野に障害が出てきます。これが緑内障という病気です。ただ、20世紀後半になって、眼圧が高くないにもかかわらず、緑内障と同じ症状を持つ人がいるのがわかり、眼圧以外の要因（視神経の血流など）が関係すること、すなわち正常眼圧緑内障の概念が登場しました。現在、日本人の緑内障の約70%は正常眼圧緑内障であると言われています。

眼圧が急激に高くなる（閉塞隅角緑内障）と、頭痛や眼の痛み、吐き気などの症状があり、この場合緑内障の発見は比較的容易です。しかし、多くは無症状のうちに視野障害が進み、視野が欠けているとわかる頃にはかなり進行していることが多く、早期発見が極めて大切といえます。最近では健診やコンタクトレンズを作るときに初めて高眼圧であるとわかるケースもあります。

緑内障（正常眼圧のものも含め）は、「眼圧を十分に下げることで視神経の障害の改善あるいは進行を阻止できる疾患」であるとの考え方から、現代医療においては点眼薬や手術などで眼圧をコントロールします。しかし、中には点眼薬が効きにくい場合や、手術後も眼圧が低く保てず、再び高くなってしまうものもあります。

今回は、緑内障の手術後に、再び眼圧が高くなってしまった患者さんの1例をご紹介します。

[症例]

32歳 男性

主訴：右眼の視野欠損・視力低下・眼圧調整不良



### ① 鍼灸治療を受けるまで

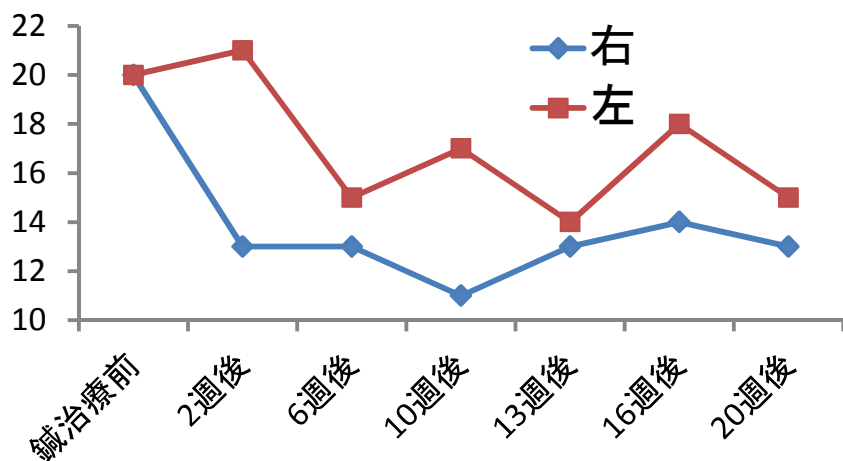
コンタクトレンズを作ろうと眼科で検査をしたところ、眼圧が高いことがわかり、検査をした結果、緑内障と診断されました。点眼薬で治療を始め、眼科に定期通院するようになりますが、途中で片眼の眼圧が50近くまで上昇（自覚症状はなかった）したため、急遽、眼圧を下げる手術を受け、眼圧は14にまで下がりました。しかし、その後すぐに眼圧が20にまで上昇し、なかなか下がらなくなったため、当院を受診しました。

病院の検査結果を見ると、右眼のみに緑内障に特徴的な視野障害が認められました。右眼のみに点眼薬を使用しています。

### ② 治療をはじめてから

鍼灸治療を始めてからの眼圧と視力の変化を下のグラフに示しました。治療は週1回のペースでスタートし、3か月後（12週間）からは2週間に1回のペースとしました。

治療をはじめてからの眼圧の変化のグラフ



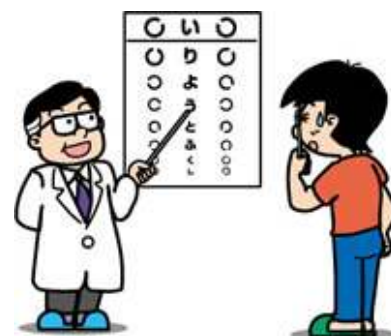
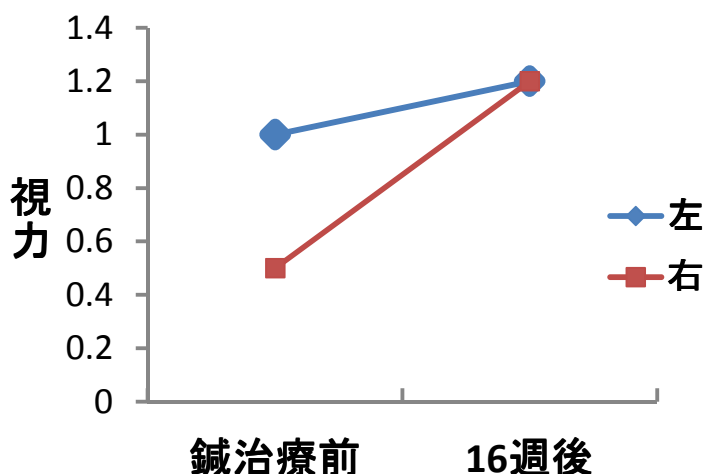
眼に「パスッ」と空気を当てるアシです↓



鍼灸治療を始める前は左右の眼圧が 20 で、正常の範囲ではありますが高い値です。しかし、治療を始めて 2 週間後には右眼の眼圧が 13 にまで、6 週間後には左眼の眼圧も 15 にまで下がりました。点眼薬を使っている右眼のほうが、眼圧の下がり方が早く、その後も低い値を維持し続けています。緑内障の治療では、点眼薬と鍼灸治療を一緒に行うと、鍼灸だけよりも眼圧をコントロールしやすい傾向があるようです。一方、左眼は点眼薬を使わず、鍼灸のみの治療でした。やや眼圧が上下する傾向があるものの、それでも当初より眼圧を低く維持できていて、鍼灸治療単独の効果も示すことができました。

矯正視力（眼鏡をかけての視力）は、治療を始める前は左 1.0、右 0.5 でしたが、治療をはじめて 4 か月後には両眼とも 1.2 となりました。視野障害のある右眼の視力が大きく向上しました。

治療をはじめてからの矯正視力の変化のグラフ



今回の患者さんの 1 例のように、緑内障の鍼灸治療は、①眼圧を低く抑える、②視力を回復させる、効果があることがわかりました。眼圧を低く抑え維持できると、視野障害の進行を抑えることにもつながります。今後、緑内障の治療の選択肢の 1 つとして鍼灸治療が広く認識されるよう、より多くのデータを集め、発表して参りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。